18　長崎浩斎筆『味噌欺録』と「淋石」

寺畑喜朔

平成二年より長崎家（高岡市）所蔵の古医書の整理を進めてきた。その間、長崎家で「淋石」と箱書された小石の入った木箱を提示された。箱蓋の裏に「天保三年壬辰三月朔到来二月廿六日射水○觸坂村紋右衛門自陰嚢出淋石同形十四匁、初診二月廿四日」とある。そして、古医書の整理を継続するうちに、浩斎筆『味噌欺録』（写本）があり、その中に「淋石」に関する診療記録を発見した。写本は二六丁からなり、天保元年から同九年までの間の十六症例が記録されている。

題言に「亡父逢洲曾テ曰療治多忙ニナレバ治験ヲ一〻記シヲク暇モナク又全快サスルガ本業ナレバアタリ前ノ亅ユヘ手柄バナシスルニモ及バヌ亅也唯誤治シタル亅アラバ必書トメヲキテ後日之心得ニスベシト健當時ハウカ〳〵ト聞テ居タレ𠮟庚寅之春ヨリ一了簡ニテ療治シテ試レバ今マデ代診シタリ執匕バカリシテ居タトハ格別ニ違フナリ因テ念ヲ入疎忽ナキヨフニト心掛レ𠮟トカク後悔スル亅多シ乃チ誤治ノ人ノ姓氏ヲトメヲキ噬臍録ト名ツケ子孫ニノコサント思ヘ𠮟自ラ誤治ト思フテモ外聞ハ左モナク外聞ハ誤治ト云ヒ誹レ𠮟自ラ恥ザル亅モアリ是ヲ以テ味噌欺録ト題シテ筐底ニ蔵スミソト云亅此邊ニテハミソヲツケタル亅バカリニ用ユレ𠮟江戸ニテハ自慢話ヲミソヲアゲルトモ云也田楽ガスギテ入道ニフヲツケト云川柳点ノ句ハ仕ソコナヒノ亅日本ノミソハスリバチフセタヤウトハ富士山ヲ自慢シタル句ナリツケルカアゲルカノ異ニテ功過トモニミソヲ蒙詞也　天保三年壬辰九月四日　長崎健浩斎」とあり、浩斎は天保元年より父逢洲に代り、主治医として外科診療を継続し、その間の診療反省録であると述べている。

「淋石」に関する記録は「壬辰二月廿四日觸坂村紋右ヱ門ナルモノ病ヲ與シテ来ルコレヲ診スルニ嚢癰ニシテ懸癰ヲ兼スルモノ也自云去冬小間物ヲ賣リニ尾張ニ往キ段〻腫タルニ困リ今年元旦ヨリ床ニツキ其瘡口自ラ開テ膿

出タリ其後尿モ交リ出名古屋ノ医者ニモカカリ療ジテ居ル中ニ中間ノ者共ニ助ラレ帰ル因テ一昨日宅ニツク早速治サンコトヲ乞フコレヲ見ルニ腫大ニシテ口モアルユヘ匆〻ニ上ハツラヲ撫テ見托裏消毒散料十四貼ニ膿気膏ヲ与ヘカヘス三月朔日ニ使ヲコシ一小石ヲ齎シテ云廿六日ノ夜瘡口ニカタキモノ出カ〻リアタレバカチカチト云ニツキ扨ケシカラヌト思フテ床カヘリスル拍子ニコロリト此石落タリアマリヨゴレ居タルユヘ洗フテ上ルト健コレヲモライヲキ秤ニカクルニ十四匁アリ大サ鶏卵ノ如ク出カ〻リシト云処ニハ光リアリ貝ノ化石ノ質ニ似タリ総体ハ土塊ノ如クニシテ鮓答ヨリハヨホド脆ク見ヘリ定テ鹹渣ノカタマリ所謂迮ト云ベキモノカト思ヘトモ姑ク癖石ト名ツケヲキ諸友ニ示スニ橋東津嶋氏本綱ヲ閲シ淋石ナルベシト云因テ箱ニ淋石ト書ツケヲク病人ヲ再診セント欲シ朔日ノ使ニモ其旨ヲ云テ薬ヲツカハスニ其ヨリ二度薬バカリ取リニ越シ漸ク廿二日ニ至テ自ラ獨歩シ来ル之ヲ診スルニ睾丸ハ二ツトモ恙ナク年ハ三十六ニテ十七ノ年始テ水疝ヲ患ヒ氷見ノ宮城永順ニカ〻リ治ス其後淋病モ患ヒ何トナク下部快カラズ又一遍膿タルコトモアリ此度ハ再発ナリ偶元城上子氏調合所へ来ルニツキ呼テ共ニ見セシムルニ膿口ハ頗ル愈テ細クナリ少〻尿漏由也又前方十四貼ト當帰膏ヲ与ヘ後服ヲ止ム帰リニ一杯飲デ帰テハイカヾ問シユヘマダ早シト禁ズ此男元来キロクサイモノニテ顔色モ赤ク目ハ片暗ナリ」、この記録から、淋石は陰嚢水腫を基因として発生した稀有なる結石と判断してよい。江戸期における人体結石の保存は華岡青洲の「尿道結石、膀胱結石」を知るに過ぎず、淋石の保存は貴重である。

試みに計測すると、五〇・八瓦、三・一立方糎で表面滑沢、灰白色ほぼ卵円形である。路傍の小石と対比して、淋石をX線投射してみると、明らかにX線の透過性が良く、鑑別が容易である。保存上、結石成分の分析は不能である。

（金沢医科大学）